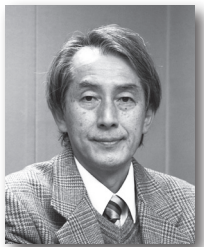


現代文 詩

二十億光年の孤独

谷川俊太郎



講師
渡部 真一

■学習のねらい■

詩に親しみ、表現の特色や、詩の言葉の微妙なはたらきを知るとともに、詩を深く味わう力を養う。

学習のポイント

- 第一連・第二連の内容を理解し、作者のユーモアを感じ取る
- 第三連から第六連の内容を読み取る
- 詩のテーマをとらえ、作者の世界観・人間観を感じ取る

理解を深めるために

* * *

第一連・第二連の内容を理解し、作者のユーモアを感じ取る

人類が、「ときどき火星に仲間を欲しがったりする」って？

火星人は、「ネリリし キルルし ハララしている」って？

火星人も、「ときどき地球に仲間を欲しがったりする」って？

それって、本当でしょうか？ 一番目はさておき、二番目と三番目は、何の根拠もなさそうなのに……。

でも、「ネリリ」「キルル」「ハララ」が、作者が作った「火星語」らしいなと気づけば、この数行に表れている作者のユーモアを感じ取ることができるのではないのでしょうか。

第三連から第六連の内容を読み取る

第三連から第五連までのそれぞれの一行目と二行目を抜き出すと、

一行目……「万有引力」「宇宙はひずんでいる」「宇宙はどどん膨ふくらんでゆく」

二行目……「ひき合う孤独の力」「みんなはもとめ合う」「みんなは不安である」となります。

一行目が「宇宙」の原理や姿について。二行目は人間という存在のあり方について。これらを作者はそれぞれ結びつけているのですが、この結びつきは「理屈」で納得するようなものではなくて、この世界、また、人間という存在に対する作者の見方の表れ（解釈のしかた）、つまり、作者の世界観・人間観であると考えたほうがよいかも知れません。

詩のテーマをとらえ、作者の世界観・人間観を感じ取る

この詩のテーマは、「宇宙の中での人間の孤独」とでも呼ぶべきものでしょうか。これはもちろん作者だけでなく、どんな人間も感じることのある、最も素朴で根源的な意味での孤独感、自分がこの宇宙に存在していることからそのまま生じてしまう孤独感、とでもいうものでしょう。宇宙の不思議さ、大きさ、ぼう漠として人間にはとても解明し切れないこと、その中で生きる人間への共感などがこの詩の奥底に流れているようで、そういった作者の世界観・人間観が、この詩からはうかがえます。

二十億光年の孤独

谷川俊太郎
たにかわしんたろう

講師
渡部真一

人類は小さな球の上で
眠り起きそして働き

ときどき火星に仲間を欲しがったりする

火星人は小さな球の上で

何をしてるか 僕は知らない

(或はネリリし キルルし ハララしているか)
しかしときどき地球に仲間を欲しがったりする
それはまったくたしかなことだ

万有引力とは

ひき合う孤独の力である

宇宙はひずんでいる

それ故みんなはもとめ合う

宇宙はどんどん膨んでゆく

それ故みんなは不安である

二十億光年の孤独に

僕は思わずくしゃみをした

谷川俊太郎 (たにかわ・しゅんたろう) 1931年(昭和6)〜
東京都生まれ。詩人。日本語による詩表現の可能性を多角的に追求し、
その活動は、童話、脚本、翻訳などにまで及ぶ。主な著作に、詩集『愛
について』『六十二のソネット』など。「二十億光年の孤独」は、『二十億
光年の孤独』(1952年刊)に収録。本文は『続続・谷川俊太郎詩集』
(1993年刊)より。